





# 鉄筋コンクリート構造配筋標準図 (1)

## 1. 一般事項

- (1) 構造図面に記載された事項は、本標準図面に優先して適用する。  
 (2) 記号  
 d…異形棒鋼の呼び名に用いた数値(径) D…部材の成、又は鉄筋内法直径  
 @…間隔 r…半径 e…中心線 l<sub>o</sub>…部分間の内法距離 ho…部材間の内法高さ  
 ST…あばら筋 HOOP…帯筋 S. HOOP…補強帯筋

## 2. 鉄筋加工

### (1) 鉄筋の折り曲げ加工

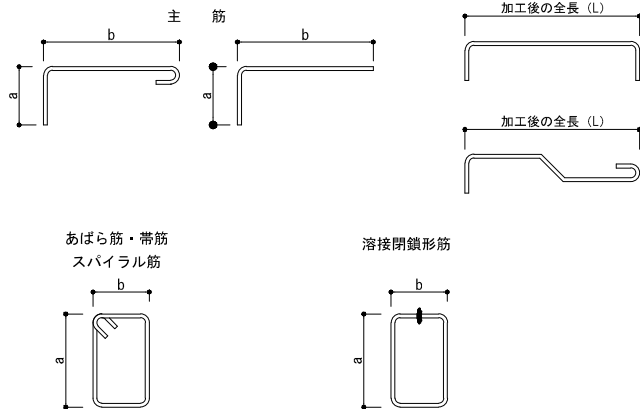
図	折り曲げ角度	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折り曲げ内法直径(D)	
	180°	SD295A SD295B SD345	D16以下	3d以上	
	135°		D19~D41	4d以上	
	90°		SD390	D41以下	5d以上
	90°			D25以下	6d以上
	90°	SD490	D29~D41	6d以上	

- [注] (1) dは呼び名に用いた数値とする。  
 (2) スパイラル筋の重ね継手部に90°フックを用いる場合は、余長は12d以上とする。  
 (3) 片持ちスラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90°フックまたは135°フックを用いる場合は、余長は4d以上とする。  
 (4) スラブ筋、壁筋には、溶接金網を除いて丸鋼を使用しない。  
 (5) 折り曲げ内法直径を上表の数値よりも小さくする場合は、事前に鉄筋の曲げ試験を行い支障ないことを確認した上で、工事監理者の承認を得る。  
 (6) SD490の鉄筋を90°を超える曲げ角度で折り曲げ加工する場合は、事前に鉄筋の曲げ試験を行い、支障ないことを確認した上で、工事監理者の承認を得る。

### (2) 加工寸法の許容差

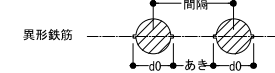
項目	符号	許容差
各加工寸法	D25以下	a, b ± 15
	D29以上D41以下	a, b ± 20
あばら筋・帯筋・スパイラル筋	a, b	± 5
加工後の全長	L	± 20

[注] (1) 各加工寸法及び加工後の全長の測り方の例を下図に示す。



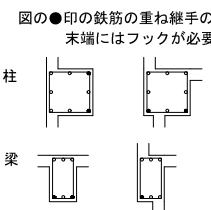
### (3) 鉄筋のあき

異形鉄筋では呼び名に用いた数値1.5d以上、粗骨材の最大寸法の1.25倍以上かつ25mmのうち最も大きい値。



### (4) 鉄筋のフック

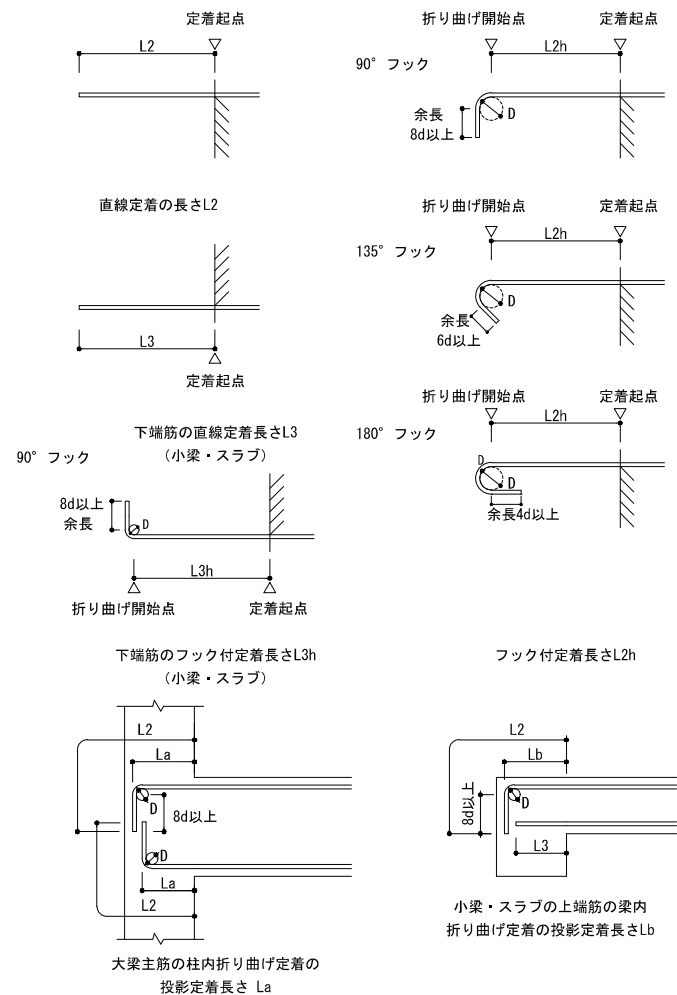
- a~eに示す鉄筋の末端部にはフックを付ける。  
 a. あばら筋、帯筋、および幅止メ筋  
 b. 煙突の鉄筋(壁の一部となる場合を含む)  
 c. 柱、梁(基礎梁を除く)の出すみ部分  
 および下端の両端にある場合の鉄筋(右図参照)  
 d. 単純梁の下端筋  
 e. その他、本配筋標準に記載する箇所



### (5) 定着長さ

鉄筋種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm <sup>2</sup> )	定着長さ						
		一般				小梁下端筋		
		L2 (フックなし)	L2h (フックあり)	La <sup>(3)</sup>	Lb	L3 (フックなし)	L3h (フックあり)	L3 (フックなし)
SD295A SD295B	18	40d	30d	20d	15d	20d	10d	10d
	21	35d	25d	15d	15d			
	24~27	30d	20d	15d	15d			
	30~36	30d	20d	15d	15d			
	39~45	25d	15d	15d	15d			
	48~60	25d	15d	15d	15d			
SD345	18	40d	30d	20d	20d	20d	10d	10d
	21	35d	25d	20d	20d			
	24~27	35d	25d	20d	15d			
	30~36	30d	20d	15d	15d			
	39~45	30d	20d	15d	15d			
	48~60	25d	15d	15d	15d			
SD390	21	40d	30d	20d	20d	20d	10d	10d
	24~27	40d	30d	20d	20d			
	30~36	35d	25d	20d	15d			
	39~45	35d	25d	15d	15d			
	48~60	30d	20d	15d	15d			
	48~60	30d	20d	15d	15d			
SD490	24~27	45d	35d	25d	—	—	—	—
	30~36	40d	30d	25d	—			
	39~45	40d	30d	20d	—			
	48~60	35d	25d	20d	—			
	48~60	35d	25d	20d	—			
	48~60	35d	25d	20d	—			

- [注] (1) フック付き鉄筋の定着長さL2hは、定着起点から鉄筋の折り曲げ開始点までの距離とし、折り曲げ開始点以降のフック部は定着長さに含まない。  
 (2) フック部の折り曲げ内法直径D及び余長は、「鉄筋の折り曲げ加工」の表による。  
 (3) 梁主筋を柱へ定着する場合、水平定着長さL2h確保できない場合は折り曲げ定着とし、全定着長をL2以上とするともに、水平投影長さをLa以上とし、余長を8d以上とする。尚、Laの値は原則として柱せいの3/4倍以上とする。  
 (4) 耐圧スラブの下端筋の定着長は一般定着L2とする



### (6) 継手

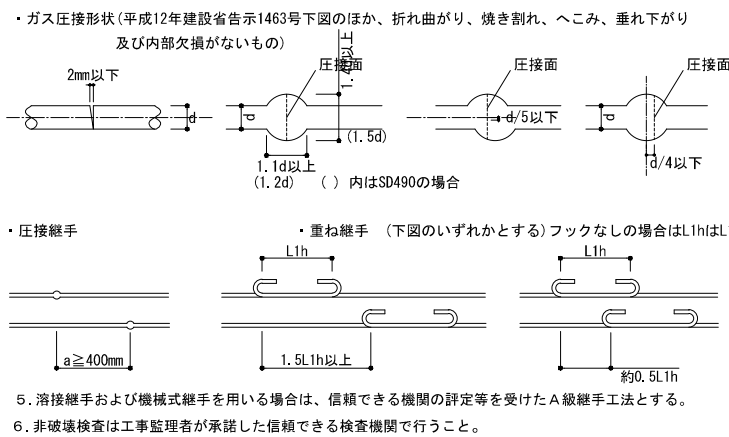
#### ■重ね継手

鉄筋種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm <sup>2</sup> )	重ね継手長さ	
		L1 (フックなし)	L1h (フックあり)
SD295A SD295B	18	45d	35d
	21	40d	30d
	24~27	35d	25d
	30~36	35d	25d
	39~45	30d	20d
	48~60	30d	20d
SD345	18	50d	35d
	21	45d	30d
	24~27	40d	30d
	30~36	35d	25d
	39~45	35d	25d
	48~60	30d	20d
SD390	21	50d	35d
	24~27	45d	35d
	30~36	40d	30d
	39~45	40d	30d
	48~60	35d	25d
	48~60	35d	25d
SD490	24~27	55d	40d
	30~36	50d	35d
	39~45	45d	35d
	48~60	40d	30d
	48~60	40d	30d
	48~60	40d	30d

- [注] (1) 表中のdは、異形鉄筋の呼び名の数値を表し、丸鋼には適用しない。  
 (2) 直径の異なる鉄筋相互の重ね継手の長さは、細い方のdによる。  
 (3) フック付き重ね継手の長さは、鉄筋相互の折り曲げ開始点間の距離とし、折り曲げ開始点以降のフック部は継手長さに含まない。

#### ■継手に関する注意点

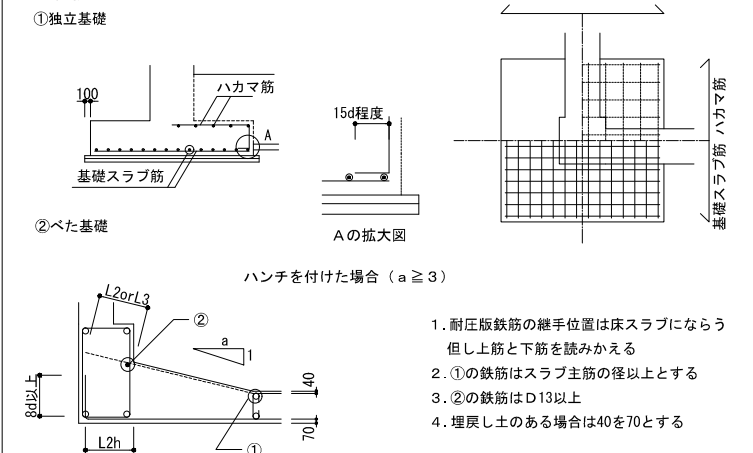
- 継手位置は、応力の小さい位置に設けることを、原則とする。
- D29以上の異形鉄筋は、原則として、重ね継手としてはならない。
- 鉄筋径dの差が7mmを超える場合は、圧接としてはならない。
- ガス圧接継手の形状、および継手の配置は下図による。



### 3. 杭・基礎

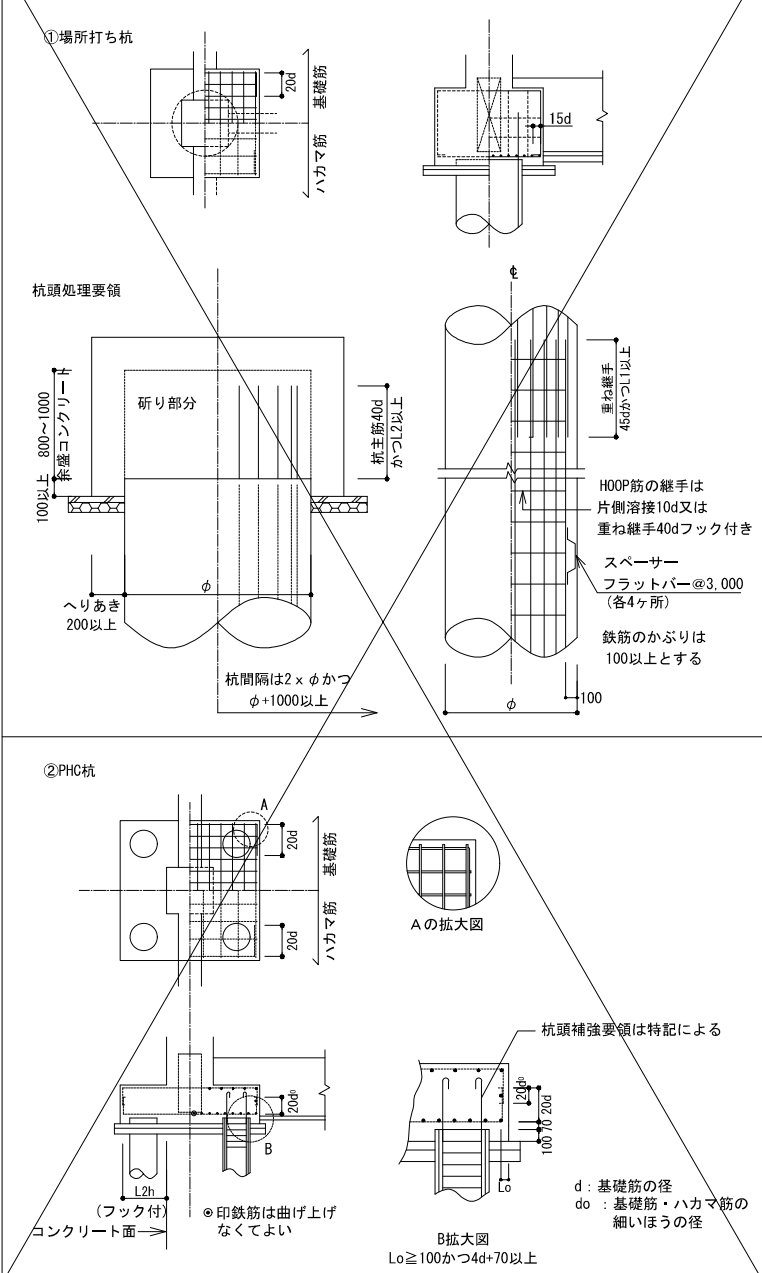
(配筋については地震力等の水平力等を考慮して別途検討すること)

#### (1) 直接基礎

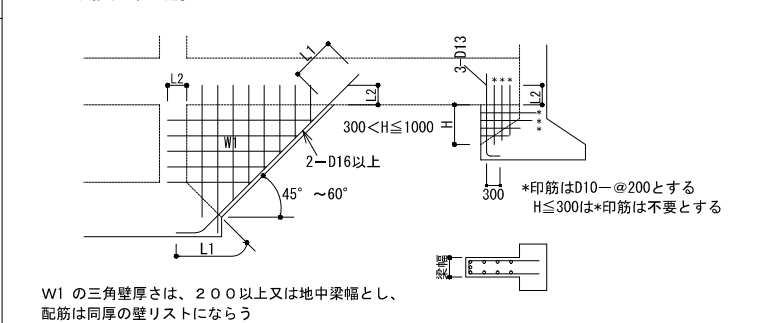


- 耐圧鉄筋の継手位置は床スラブにならう但し上筋と下筋を読みかえる
- ①の鉄筋はスラブ主筋の径以上とする
- ②の鉄筋はD13以上
- 埋戻し土のある場合は40を70とする

### (2) 杭基礎



#### (3) 基礎接合部の補強



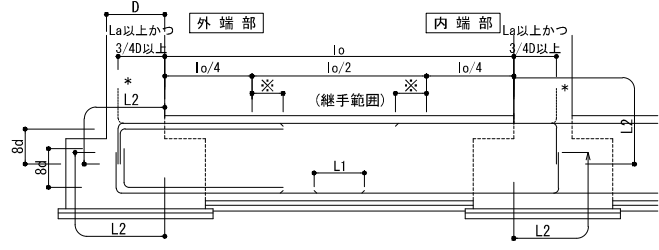
W1の三角壁厚さは、200以上又は地中梁幅とし、配筋は同厚の壁リストにならう

設計者	承認	審査	検図	製図	特記	改訂番号	改訂月日	改訂内容	業務番号	工事名称	縮尺	図面区分	図面番号
									23038	岩手県立不來方高等学校柔剣道場新築(建築)工事	—	建築構造	S-03

# 鉄筋コンクリート構造配筋標準図 (2)

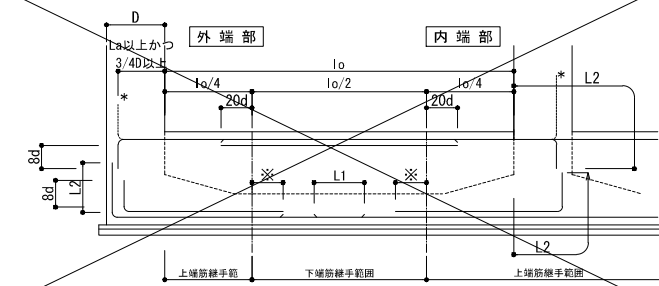
## 4. 地中梁

(1) 独立基礎、杭基礎の場合 (定着、継手) ※上端主筋の定着は、やむを得ない場合、上向きとすることができる。



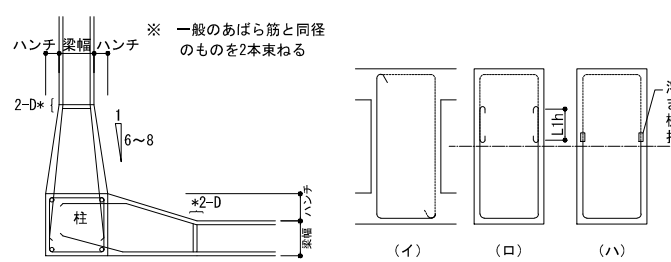
※ 主筋のカットオフ長さは $l_0/4+15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は6.大梁の項の表6-1による

(2) 布基礎、べた基礎の場合 (定着、継手)



※ 主筋のカットオフ長さは $l_0/4+15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は6.大梁の項の表6-1による

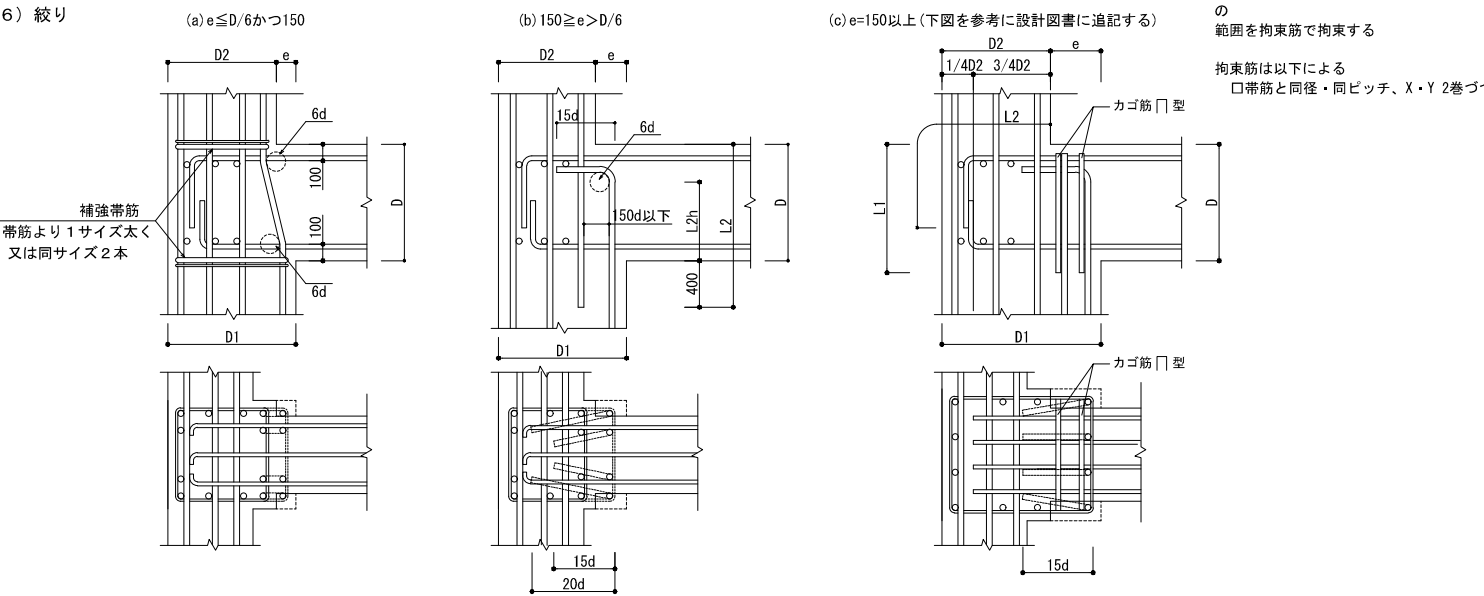
(3) 水平ハンチの場合のあばら筋加工要領 (4) せいの高い梁のあばら筋加工要領図



\*一般のあばら筋と同径のものを2本束ねる

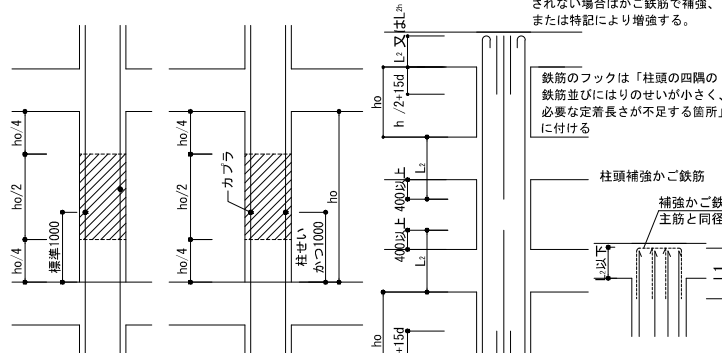
[注] (イ)で、 を使用してよいが、 は使用してはいけない (ロ)では、あばら筋の継手は180°フック付きとする。

## (6) 絞り

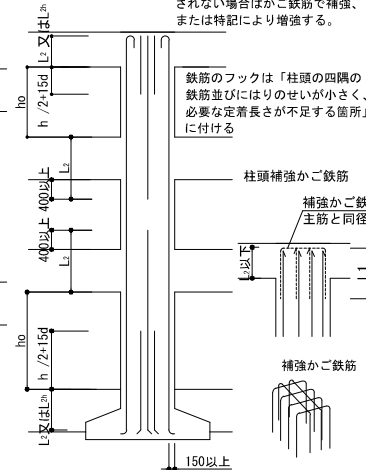


## 5. 柱

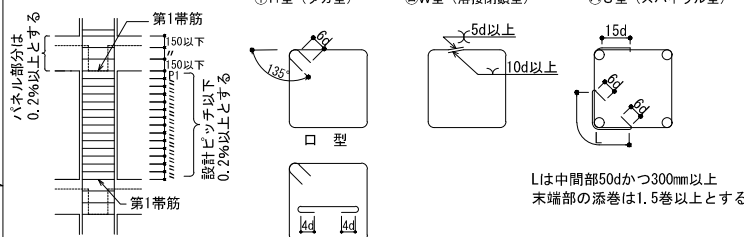
(1) 柱主筋の継手位置



(2) 柱主筋の定着

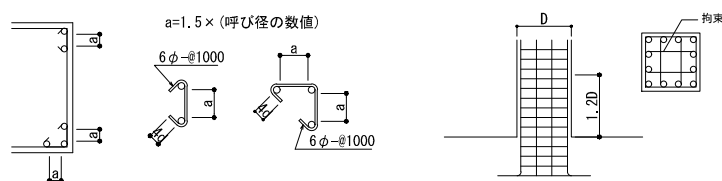


(3) 帯筋

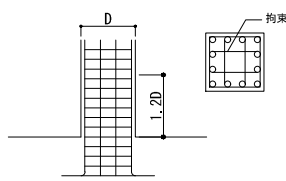


注1. 第1帯筋は、梁づらに入れる。  
注2. W型で現場溶接をする場合は主筋の位置をさける。  
注3. フックおよび継手の位置は、交互とする。

(4) 寄せ筋の保持



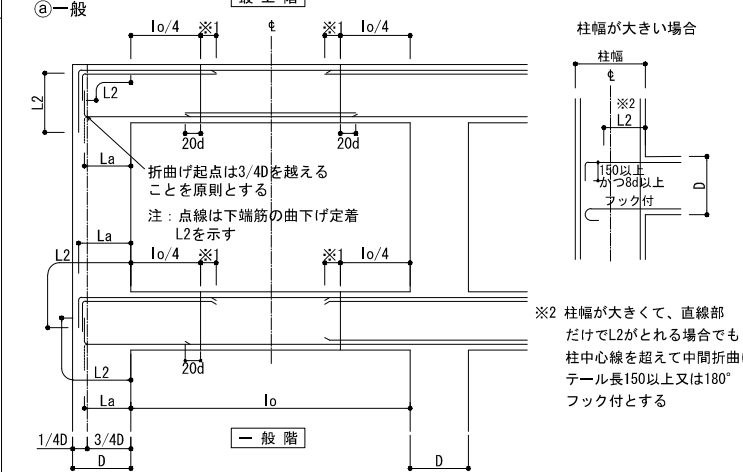
(5) 柱脚部の補強



1階柱脚の主筋は梁上から柱せいの1.2倍の範囲を拘束筋で拘束する  
拘束筋は以下による  
口帯筋と同径・同ピッチ、X・Y 2巻づつ

## 6. 大梁

(1) 定着



※1 主筋のカットオフ長さは $l_0/4+15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は表6-1による

(2) ハンチがある場合

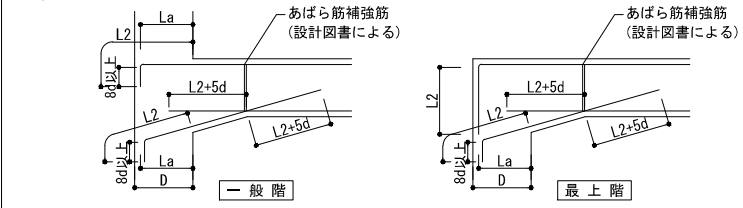
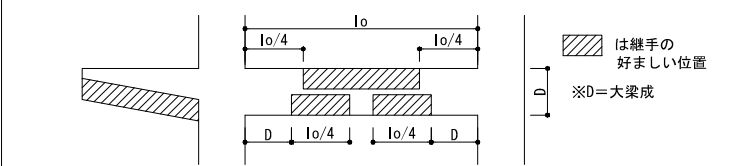


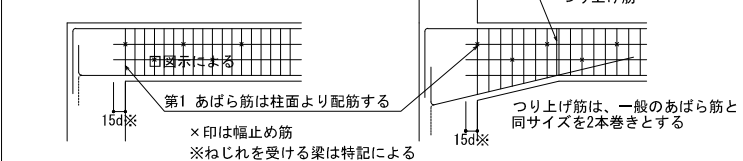
表6-1 特別なカットオフ長さを要する部材 (mm)

部材名	$l_0/4$ に加える長さ	部材名	$l_0/4$ に加える長さ

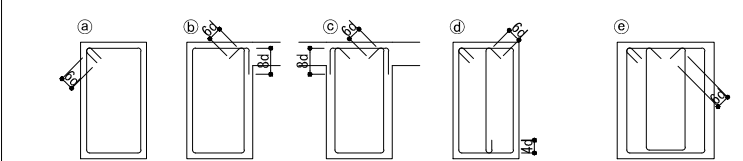
(2) 大梁主筋の継手



(3) あばら筋、腹筋、幅止めの配置



(4) あばら筋の型

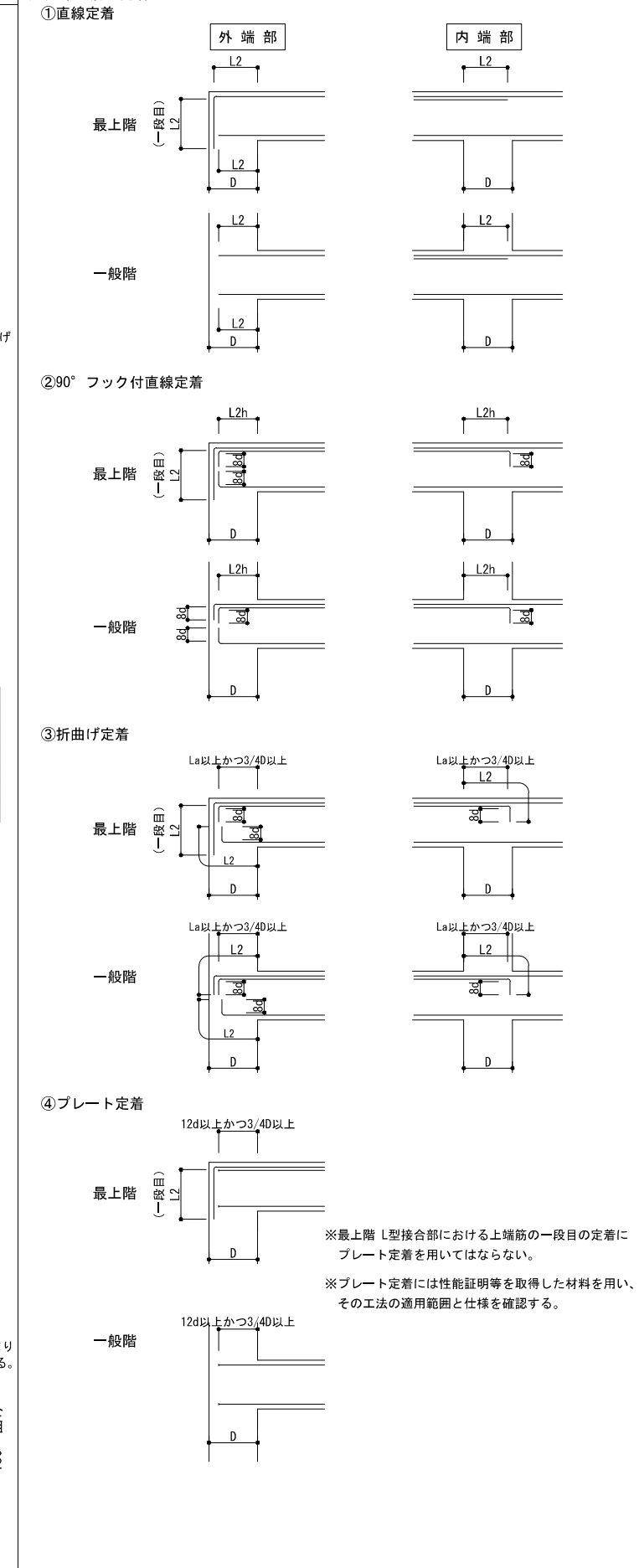


(イ)原則として (ロ)のフック先曲とする。片側床版付(L型)梁で (イ)、両側床版付(T型)梁で (ロ)又は (イ) とすることができる。  
(ロ)フックの位置は (イ) にあつては交互、 (ロ) にあつてはスラブ付側とする。

(5) 幅止め筋の本数、加工

腹筋	D < 600 不要 600 ≤ D < 900 2-D10 1段 900 ≤ D < 1200 4-D10 2段 1200 ≤ D D10@300以内 1200以上 D13@300以内
幅止め筋	D10@1000以内で割り付ける

## (6) 梁主筋の定着



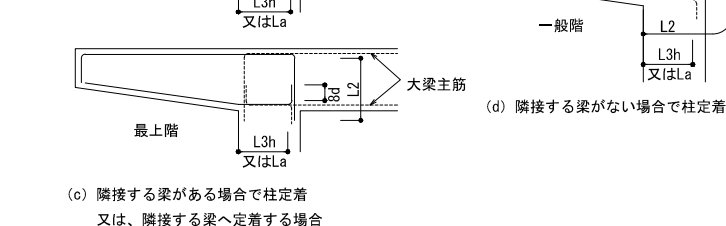
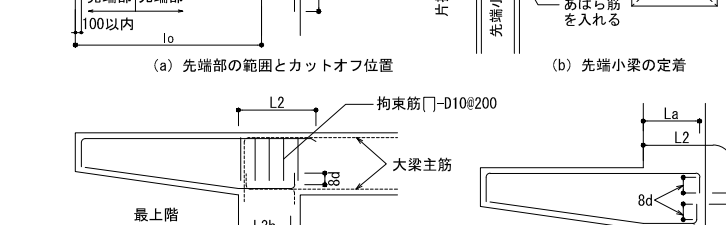
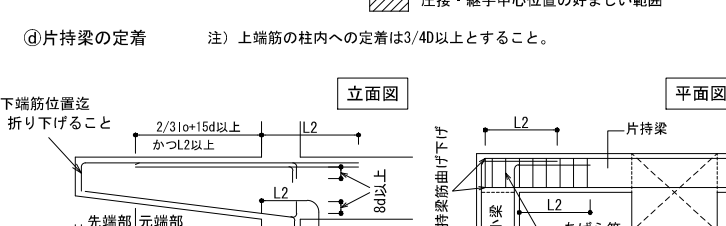
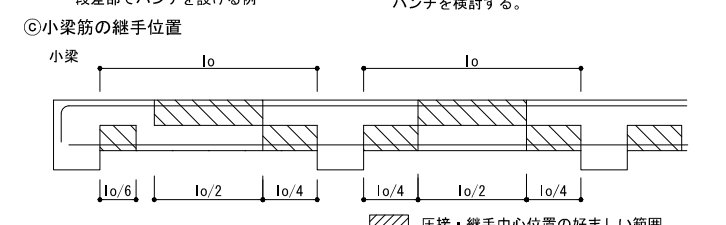
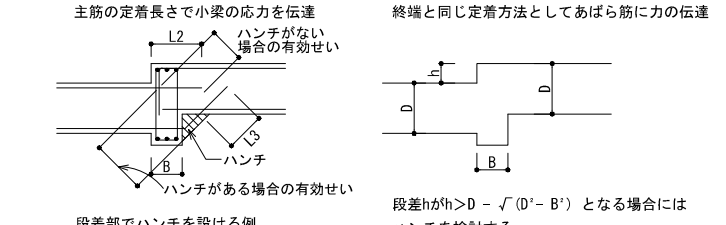
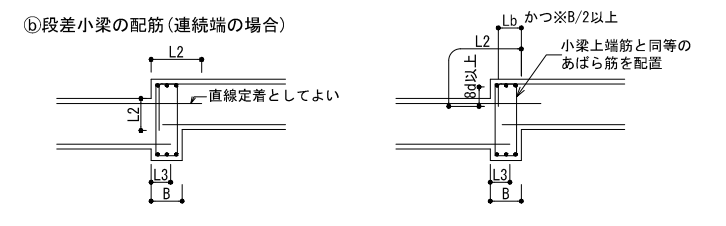
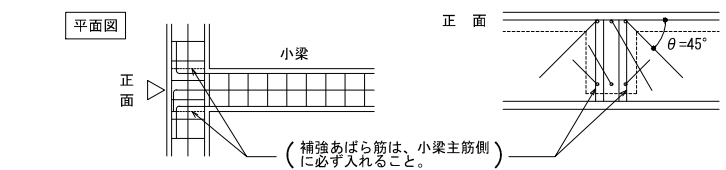
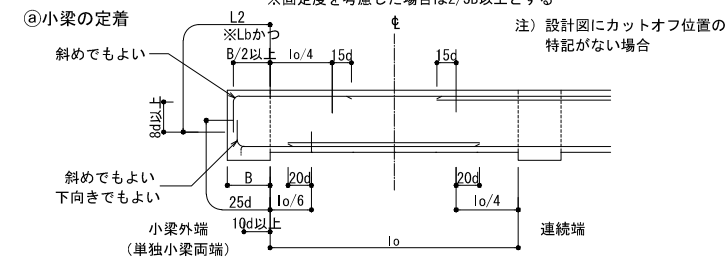
※最上階 L型接合部における上端筋の一段目の定着にプレート定着を用いてはならない。  
※プレート定着には性能証明等を取付た材料を用い、その工法の適用範囲と仕様を確認する。



# 鉄筋コンクリート構造配筋標準図 (3)

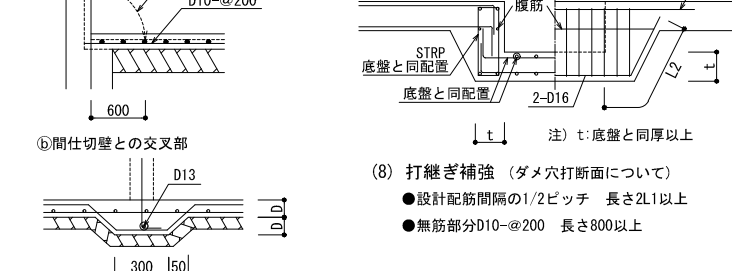
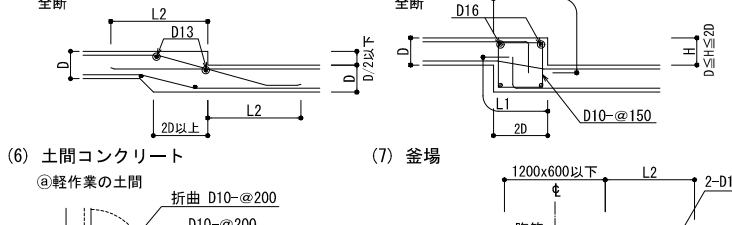
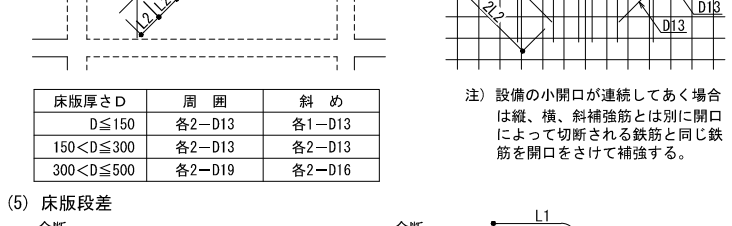
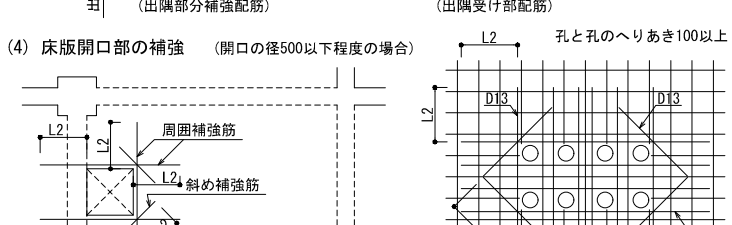
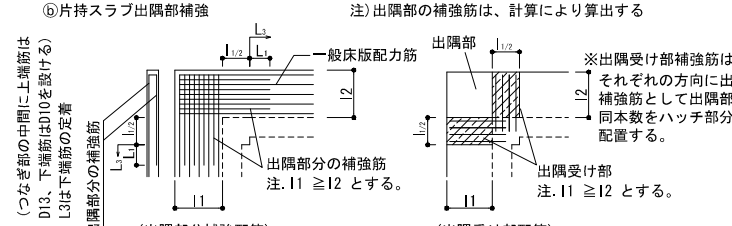
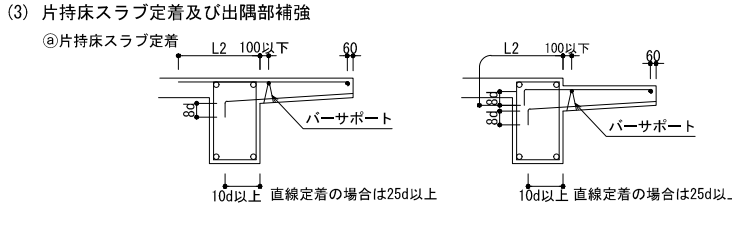
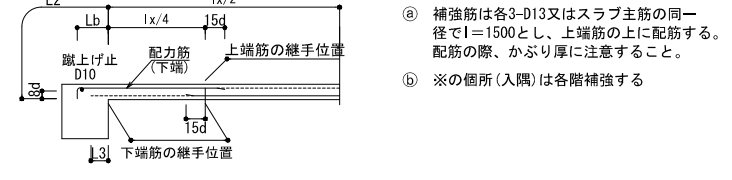
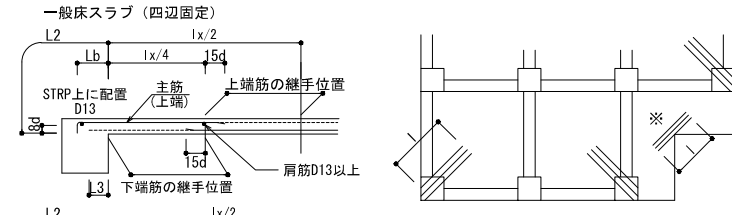
## 7. 小梁、片持梁

### (1) 定着



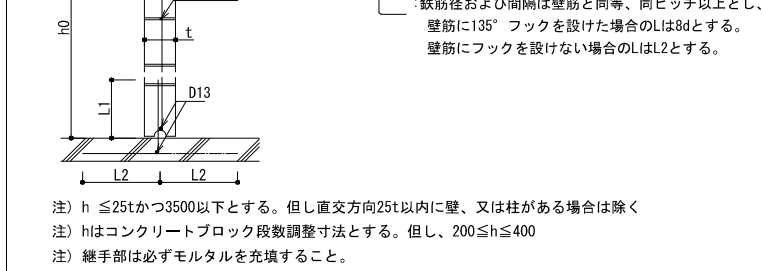
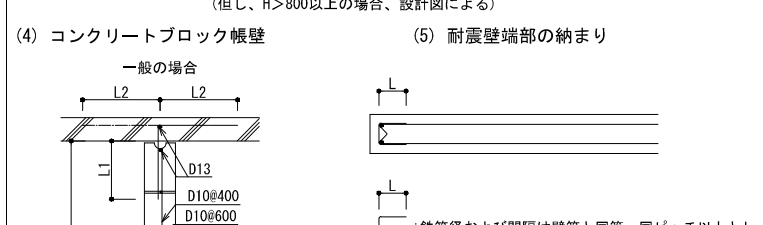
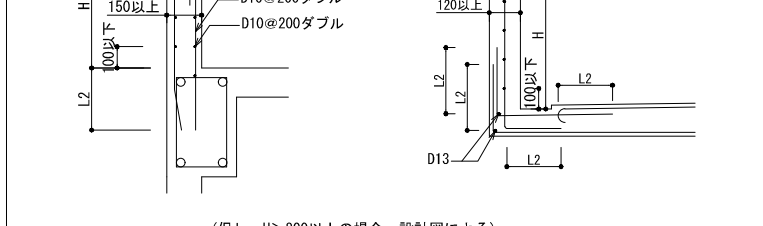
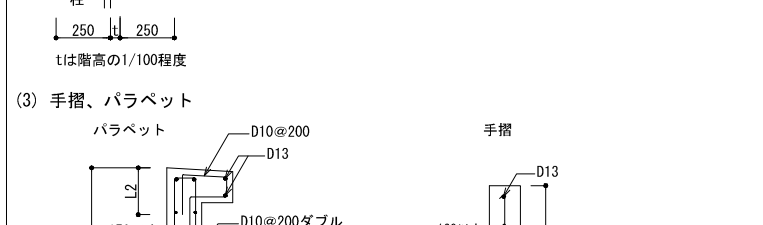
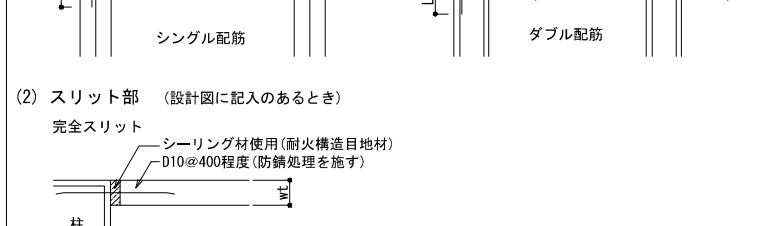
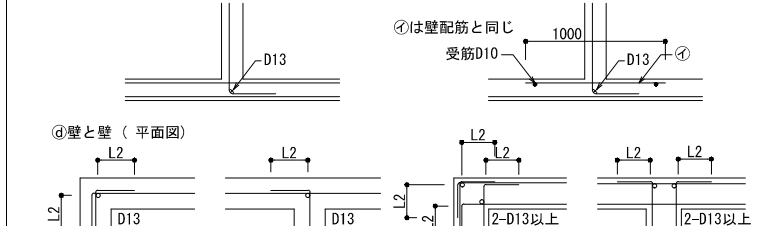
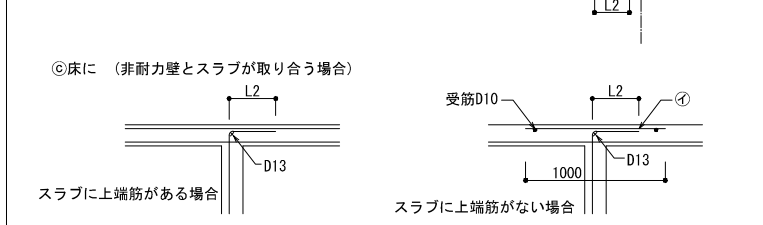
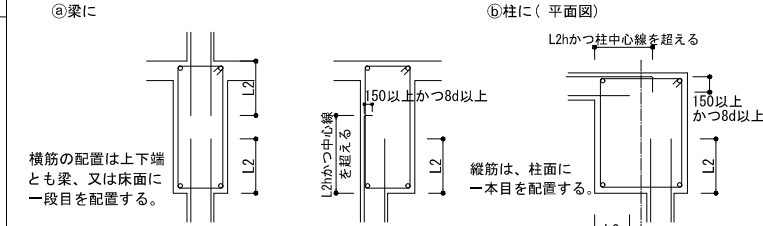
## 8. 床板

### (1) 定着および継手

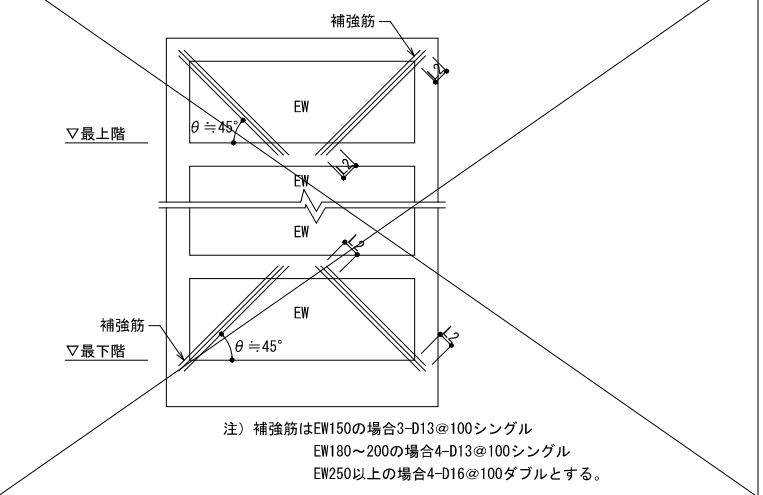


## 9. 壁

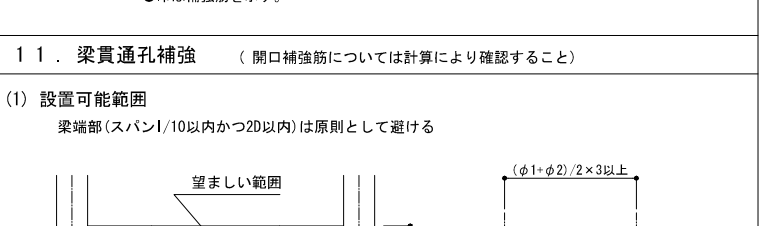
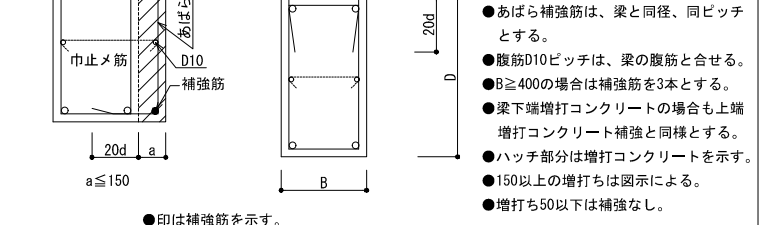
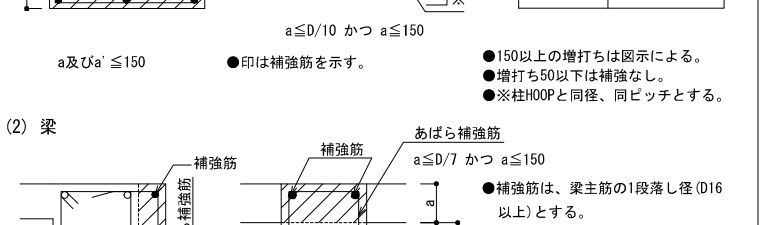
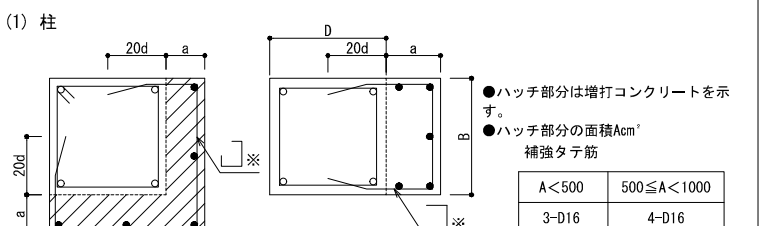
### (1) 定着



## (6) 連層耐震壁乾燥収縮の補強筋



## 10. 柱、梁増打コンクリート補強



設計者	承認	審査	検図	製図	特記	改訂番号	改訂月日	改訂内容	業務番号	工事名称	縮尺	図面区分	図面番号
									23038	岩手県立不來方高等学校柔剣道場新築 (建築) 工事	—	建築構造	S-05

# 鉄骨構造標準図 (1)

※修正箇所は下線を引くこと

## 1. 一般事項

### (1) 材料及び検査

- (a) 新構造設計特記仕様その1による
- (b) 本標準図はベースプレートを除き鋼材の厚さ40mm以下の工事に適用する。但し、ベースプレートの厚さは除く
- (c) 社内検査結果の検査報告書には、鉄骨の寸法・精度及びその他の検査結果を添付する。

### (2) 工作一般

- (a) 鉄骨製作及び施工に先立って「鉄骨工事施工要領書」を提出し工事監理者の承認を得る。
- (b) 鋼管部材の分岐継手部の相貫切断は、鋼管自動切断機による。
- (c) 高張力鋼の歪み矯正は、冷間矯正とする。

### (3) 高力ボルト接合

- (a) 本締め使用するボルトと、仮締めボルトの併用はしてはならない。
- (b) 高力ボルトの摩擦面の処理は黒皮などを産金外径2倍以上の範囲でショットブラスト、グラインダー掛け等を用いて除去した後、一様にさびを発生させた状態とする。但しショットブラスト、グリットブラストによる処理で表面荒さが、50 $\mu$ m Rz以上である場合は、さびの発生は要しない。
- (c) 高力ボルトの締付けに使用する機器はよく整備されたものを使用し、締付けの順序は部材が十分に密着するよう注意して行う。

### (4) 溶接接合

- (a) 平成12年建設省告示第1464号第二号イ、ロによる、溶接部の性能、溶着金属の性能を満足すること。
- (b) 溶接技能者

溶接技能者は施工する溶接に適合するJISZ3801(手溶接)又はJISZ3841(半自動溶接)の溶接術検定試験に合格し引続き、半年以上溶接に従事している者とする

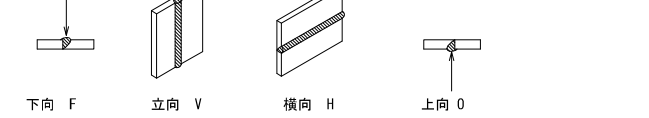
#### (c) 溶接機器

- (イ) 交流アーク溶接機 300A~500A
- (ロ) アークエアガウジング機(直流)
- (ハ) セルフシールドアーク溶接機
- (ニ) 炭酸ガスアーク半自動溶接機
- (ヒ) 溶接電流を測定する電流計
- (ヘ) 溶接棒乾燥機

#### (d) 溶接方法

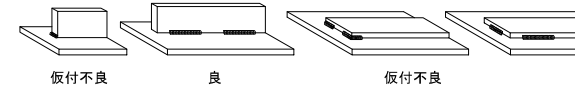
- 被覆アーク溶接(アーク手溶接、MC、MP)
- ガスシールドアーク溶接(半自動溶接、GC、GP)
- セルフシールドアーク溶接(半自動溶接、NGC)
- アークエアガウジング(AAG)

#### (e) 溶接姿勢

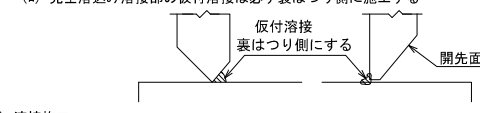


#### (f) 組立溶接技能者は、原則として本工事に従事する者が行う

- (イ) 仮付位置



- (ロ) 完全溶込み溶接部の仮付溶接は必ず裏はつり側に施工する



#### (g) 溶接施工

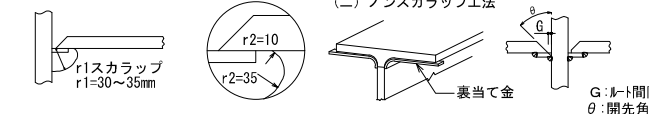
- (イ) エンドタブ
- ・完全溶込み溶接、部分溶込み溶接の両端部に母材と同厚で同開先形状のエンドタブを取り付ける。
  - ・エンドタブの材質は、母材と同質とする。但し、鉄骨製作に十分な実績があり、かつ溶接部の品質が十分確保できると判断される場合には監理者の承認を受けて他の方法とすることができる。
  - ・エンドタブの長さは、MC:35mm以上
  - ・NGC、GC:40mm以上とし特記のない場合は、溶接終了後、母材より10mm程度残し切断して、グラインダー仕上げとする。
  - ・プレス鋼板タブ、固形タブ使用については、資料を提出し設計者、又は工事監理者の承認を得る。

#### (ロ) 裏当て金

- 材質は母材と同質材料とし厚さは手溶接で6mm、半自動溶接で9mm以上、巾は25mm以上を原則とする
- 但し、溶接性能が確認できれば監理者の承認を得て変更することができる。

#### (ハ) スカラップ半径はr1=30~35mmとr2=10mmのダブルアールとする

- 但し梁成が D=150mm未満の場合のスカラップはr1=20mmとする



#### (ホ) 裏はつり

- 標準図の溶接においてAAGと記載のある部分は全て、アークエアガウジングを行った上で、部材に確認マークを付ける。

- (ヘ) 現場溶接の開先面には、溶接に支障のない防錆材を塗布する。又、開先部を傷めない様に養生を行う

### (5) 塗装

コンクリートに埋込まれる部分及びコンクリートとの接触面で、コンクリートと一体とする設計仕様になっている部分は、塗装をしない

## 2. 溶接標準図

(注) f:余盛 G:ルート間隔 R:フェース S:脚長 (単位 mm)

### (1) 隅肉溶接

t ≤ 16			
t	7以上	8~10	11~13
S	6	7	10

- 但し片面溶接の場合はS=tとする
- tはt1、t2の小なる方とする
- 余盛は(1+0.1S)mm以下とする
- 軸力が加わる場合のSは母材と同厚とすることが望ましい

### (2) 部分溶け込み溶接 (使用箇所注意)

R ≤ 2  
t/4 ≤ f ≤ 10  
t ≤ t1

t	16 < t ≤ 40
溶接姿勢	F.V

### (3) 完全溶込み溶接 (平継手 T形継手)

t/4 ≤ f ≤ 10

t	6 ≤ t ≤ 40
溶接姿勢	F.V

t/4 ≤ f ≤ 10

tmm	θ	MC, NGC			GC		
		G	t <sup>1</sup>	L	G	t <sup>1</sup>	L
6 < t < 12	45°	6	6	5	45°	6	6
12 ≤ t < 16	35°	9	9	8	45°	6	9
16 ≤ t ≤ 40	35°	9	9	8	35°	9	9

溶接姿勢 F.V

T形突合せ継手余盛

t/4 ≤ f ≤ 10

のど厚tmm	余盛の高さmm
t ≤ 4	1
4 < t ≤ 12	2
12 < t ≤ 19	3
19 < t ≤ 40	4

溶接姿勢 F.V

0 < f ≤ 3.0 (但し、t ≥ 15mmの時3.0mmを4.0mmとする)

t/4 ≤ a ≤ 10 (平継手で板厚が異なる時)

t	6 < t ≤ 40
溶接姿勢	F.V

0 < f ≤ 3.0 (但し、t ≥ 15mmの時3.0mmを4.0mmとする)

tmm	θ	MC, NGC			GC		
		G	t <sup>1</sup>	L	G	t <sup>1</sup>	L
6 < t < 12	45°	6	6	5	45°	6	6
12 ≤ t ≤ 19	35°	9	9	5	45°	6	9
19 < t ≤ 40	35°	9	9	8	35°	9	9

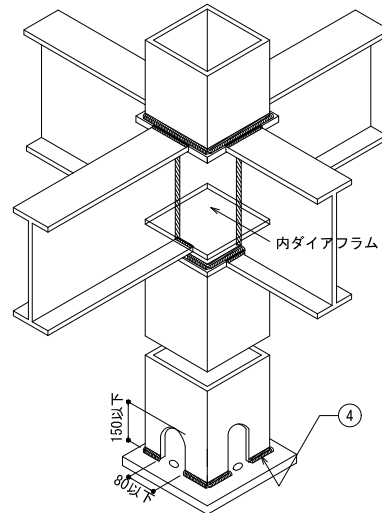
溶接姿勢 F.V

### (4) フレア溶接

寸法(mm)		
φ	B	S
9	7	4
13	8	4.5
16	9	5
19	10	6
22	11	7
25	12	8

- フレア溶接長は、鋼板に接する全長とする
- 9mm~16mm は1パス以上、19mm以上は2パス以上とする
- 溶接棒角度θは30°~40°とする

## ●B O X型 (通しダイアフラムの場合)

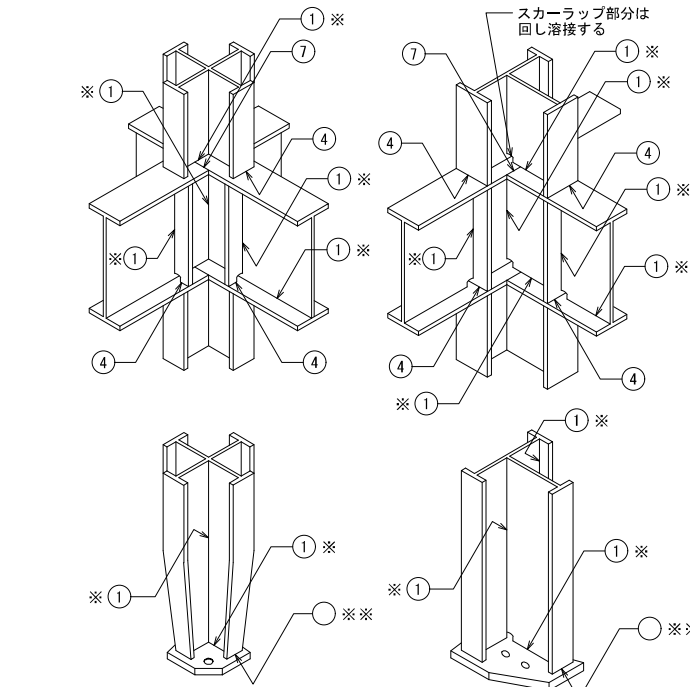


## ●鋼材種別による溶接条件

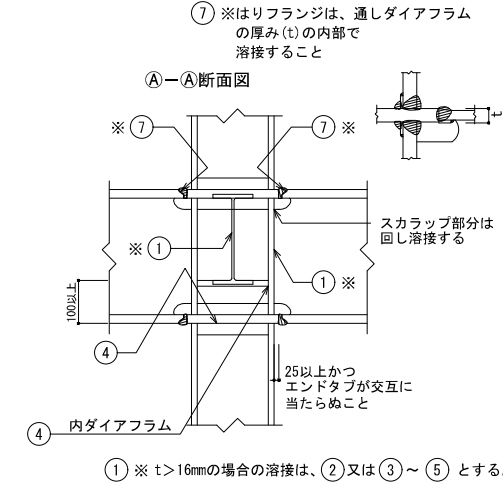
鋼材の種類	溶接材料	溶接材料と入熱・パス間温度	
		入熱 (KJ/cm)	パス温度差 (°C)
400N/mm <sup>2</sup> 級鋼	JIS Z 3312	40 以下	350 以下
	YGW-11, 15		
	YGW-18, 19		
	JIS Z 3315		
490N/mm <sup>2</sup> 級鋼	JIS Z 3312	40 〃	350 〃
	YGW-11, 15		
	YGW-18, 19		
	JIS Z 3315		

注) SKR, BCR, BCP材はJIS Z 3312のみ使用可  
「新構造設計特記仕様その1 6. 鉄骨工事 (2) 口認定または登録工場」のグレード別に定められた適用範囲と溶接条件制限事項による。

## ●H H型



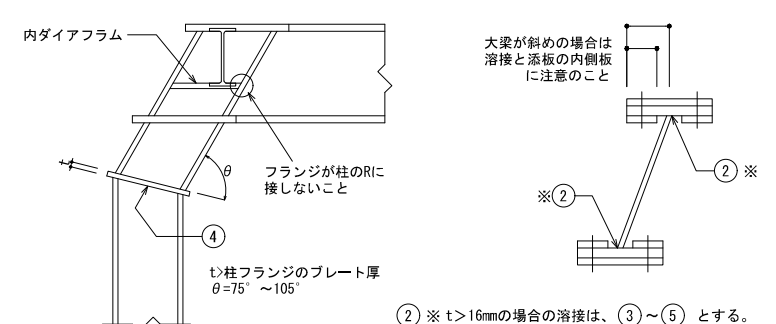
- ① ※ t > 16mmの場合の溶接は、②又は③~⑤とする。
- ② ※ 印は設計者が記入すること。



- ① ※ t > 16mmの場合の溶接は、②又は③~⑤とする。

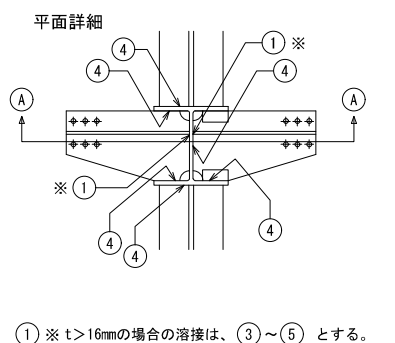
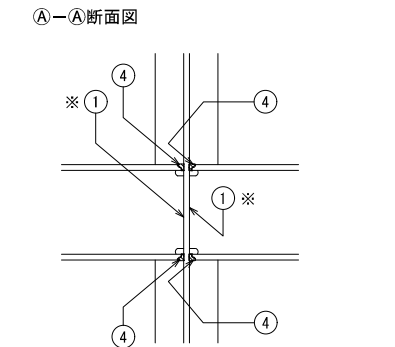
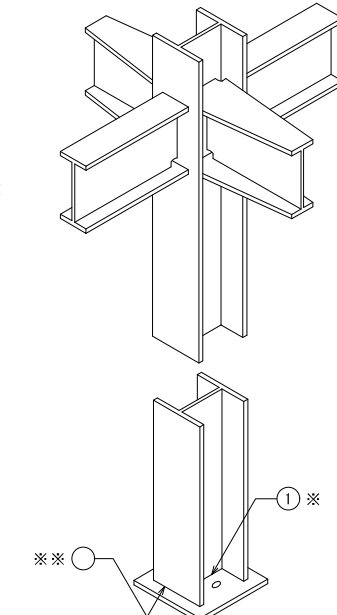
ダイアフラム厚は、接合する梁の最大厚の2サイズアップ以上とする。  
<柱材料:BCR295、BCP325を使用する場合>  
ダイアフラムは、柱フランジ厚 16mm未満の場合 SN490C SN490B  
柱フランジ厚 16mm以上の場合 SN490C を使用する。

## ●柱が途中で折れる場合、及び梁せいが異なる場合



- ② ※ t > 16mmの場合の溶接は、③~⑤とする。

## ●B.H方式



- ① ※ t > 16mmの場合の溶接は、③~⑤とする。

設計者	承認	審査	検図	製図	特記	改訂番号	改訂月日	改訂内容	業務番号	工事名称	縮尺	図面区分	図面番号
									23038	岩手県立不来方高等学校柔剣道場新築 (建築) 工事	—	建築構造	S-06
											図面内容		鉄骨構造標準図 (1)

# 鉄骨構造標準図 (2)

※修正箇所は下線を引くこと

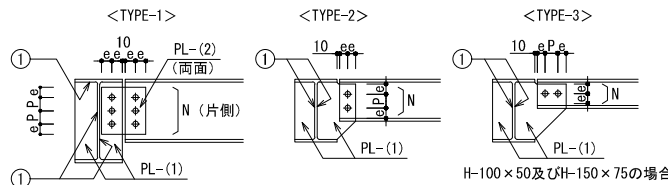
## 3. 継手標準図、その他

(1) 高力ボルト、ボルト、アンカーボルトピッチ (P) ボルト穴径・最小縁端距離 (mm)

呼び径 d	ボルト穴径	最小縁端距離 (e)			ピッチ (P)		
		(1)	(2)	(3)	(2) (3) の標準	最小	標準
高力ボルト	M16	18	40	28	22	40	60
	M20	22	50	34	26	40	60
	M22	24	55	38	28	40	60
	M24	26	60	44	32	45	60
アンカーボルト (内はボルト・を示す を越える)	M16	21 (16.5)	28	22	(40)	(40)	(60)
	M20	25 (20.5)	34	26	(40)	(50)	(60)
	M22	27 (22.5)	38	28	(40)	(55)	(60)
	M24	29 (24.5)	44	32	(45)	(60)	(70)
	M27	32	49	36			
	M30	35	54	40			
	M30	呼び径+5	9d/5	4d/3			

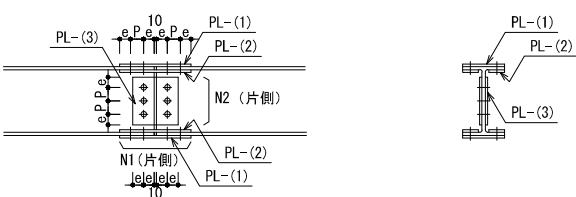
- [注] (1) 引張材の接合部で応力方向にボルトが3本以上並ばない場合の応力方向の縁端距離  
 (2) せん断縁・手動ガス切断縁の場合の縁端距離  
 (3) 圧延縁・自動ガス切断縁・のり引き縁・機械仕上縁の場合の縁端距離

(2) ピン接合梁継手リスト



符号	タイプ	部材	PL-(1)	PL-(2)	N-径
	3	H-125・60・6・8	6		2-M16
	3	H-150・75・5・7	6		2-M16
	2	H-175・90・5・8	6		2-M16
	2	H-200・100・5.5・8	6		2-M16
	2	H-250・125・6・9	6		3-M16
	2	H-300・150・6.8・9	9		3-M20
	2	H-350・175・7・11	9		4-M20
	1	H-350・175・7・11	9	6	4-M20
	2	H-400・200・8・13	9		5-M20
	1	H-400・200・8・13	9	9	4-M20

(3) 剛接合梁継手リスト (SCSS-H97による)

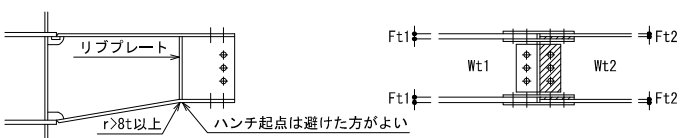


[注] 端部をBHとする場合は設計図による

符号	部材	フランジ			ウェブ	
		PL-(1)	PL-(2)	N1-径	PL-(3)	N2-径

(4) ハンチ部の継手

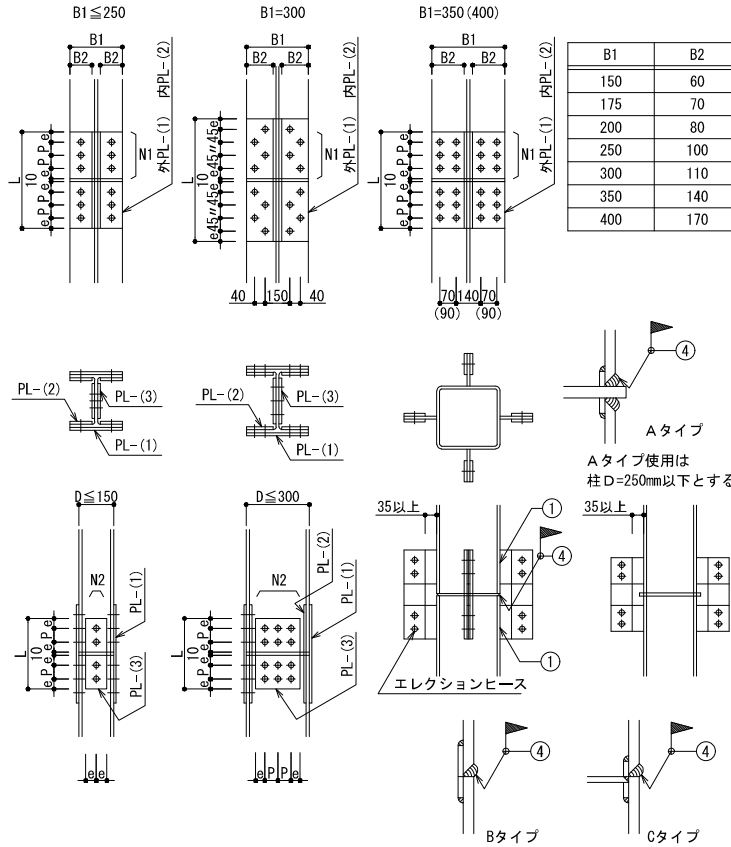
フランジ及ウェブ厚の差のある場合



ハンチ勾配は普通1:4程度であるが構造図による  
 r:半径 t:板厚

Ft1-Ft2 ≥ 1mm フィラプレート併用の事  
 Wt1-Wt2

(5) 柱継手リスト



[注] 現場溶接は原則として超音波探傷試験を100%行う

符号	部材	フランジ		ウェブ		
		PL-(1)	PL-(2)	N1-径	PL-(3)	N2-径

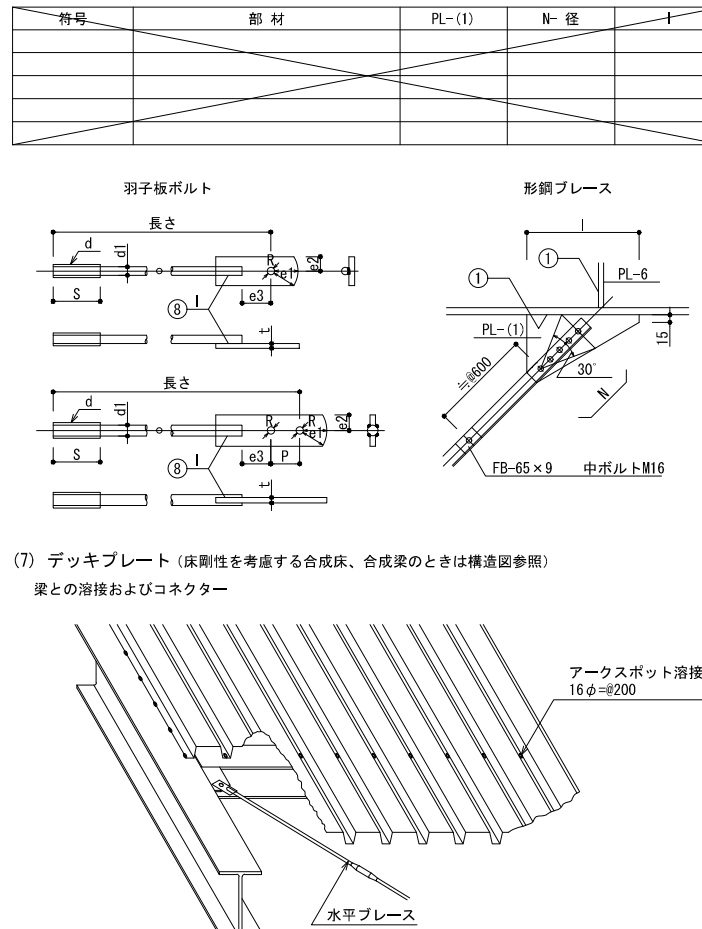
(6) 鉄筋ブレース (JIS規格品とする…JIS A 5540…2008/5541…2008)

(a) 羽子板ボルト

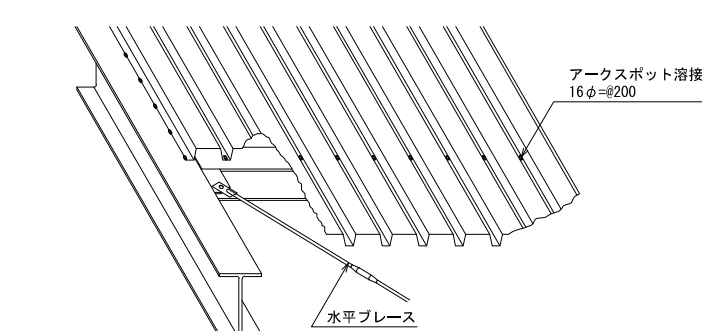
ねじの呼び (d)	調整ねじの長さ							
	最大	M12	M14	M16	M18	M20	M22	M24
軸径d1	最	10.83	12.66	14.66	16.33	18.33	20.33	22.00
	小	10.59	12.41	14.41	16.07	18.07	20.07	21.69
調整ねじの長さ	S	100	115	125	140	150	165	175
取付ボルト穴径	R	17.0	17.0	17.0	21.5	21.5	23.5	21.5
許容差+0, -0.5mm								
はしあき (最小)	(2) e1	40	40	45	50	50	55	50
へりあき (最小)	(1) e2	28	28	28	34	34	38	38
切板製	板厚 t	6	6	6	9	9	9	9
平鋼製	へりあき (最小)	e2	25.0	25.0	25.0	32.5	32.5	37.5
	板厚 t	6	6	6	9	9	9	9
ボルト端から取付ボルト穴心のあき (最小)	e3	52	52	59	66	66	73	70
溶接長さ (最小)	W	40	50	55	60	75	85	85
(2) 取付ボルト	種類	JIS B 1186 2種高力ボルト (F10T) (3)						
	ねじの呼び	M16	M16	M16	M20	M20	M22	M20
本数		1	1	1	1	1	1	2

[注] (1) e1, e2 が確保されてれば形状は自由でよい。  
 (2) 羽子板とガセットプレートの場合は表に示す取付ボルトを使用し、一面せん断 (支圧) 接合とする。  
 (3) 溶融亜鉛めっき製品では、JIS B 1186 に規定する 1種 F8TAに準じるものを使用する。

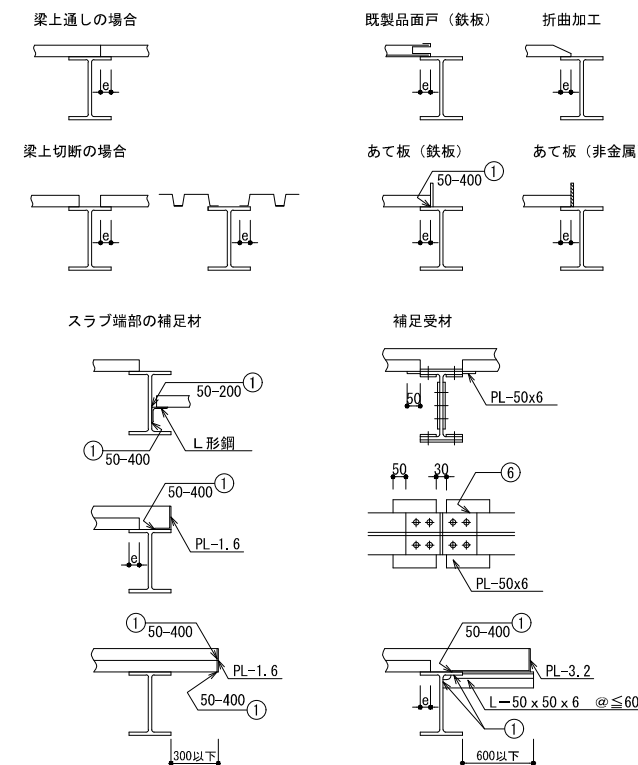
(b) 形鋼ブレース



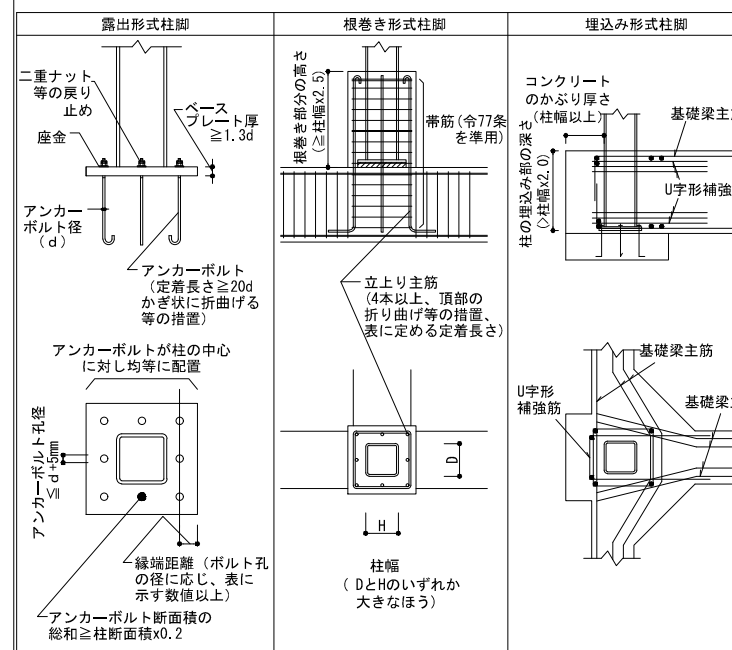
(7) デッキプレート (床剛性を考慮する合成床、合成梁のときは構造図参照) 梁との溶接およびコネクタ



受梁へのかかり寸法および端部処理  
 e: 長手方向で50mm以上、幅方向で30mm以上とする。且つ、各メーカーの仕様による。



(8) 柱脚 (注) 許容応力度計算を行わなかった場合の構造形式 ※構造用アンカーボルトは原則としてJIS B 1220、JIS B 1221を使用する。



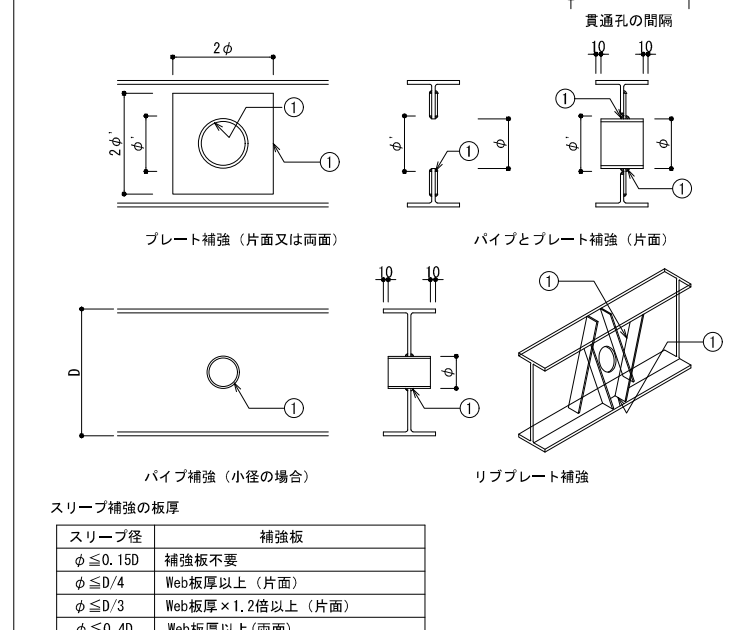
(9) 頭付きスタッド (JIS B 1198-2011)

スタッド材の標準形状・寸法

形状	スタッド材				
	呼び名	軸径 d mm	頭径 D mm	頭高さ T mm	呼び長さ L mm
	φ13 mm	13	25	8	□80 □100 □120 □
	φ16 mm	16	29	8	□80 □100 □120 □
	φ19 mm	19	32	10	□80 □100 □120 □150 □
	φ22 mm	22	35	10	□80 □100 □120 □150 □
	φ25 mm	25	41	12	□120 □150 □170 □

(10) 梁貫通補強

- 計算で確認された場合は下図の位置、寸法及び補強方法によらずに良い。
- 梁端部 (内法スパン0の1/10以内かつ、2D以内) は避ける
- φ ≤ 0.4D
- φ' は補強板の穴径を示す



スリーブ補強の板厚	
スリーブ径	補強板
φ ≤ 0.15D	補強板不要
φ ≤ D/4	Web板厚以上 (片面)
φ ≤ D/3	Web板厚×1.2倍以上 (片面)
φ ≤ 0.4D	Web板厚以上 (両面)